

# ISの二次創作の設定を 作ってみた

rain time

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一つの作品が終わっていないのに新しいネタは思いついてしまう。でもそれを書く  
と今まで書いていた作品の頻度が落ちてしまう。

ならここで導入やキャラだけ置いておこう。もしかしたら誰かが書いてくれるかも  
しれない

そんな思いで投稿しています。

あくまでもISの二次創作であり、ほかのクロスオーバーは考えていません

# 目次

隻腕は剣で語りあう	1
記憶喪失の少年が恋する人は	4
バトル？恋愛？ハーレム？俺がやりたいのは○○だ!!	8
見殺しにした贖罪	14
人生の原初を探る者	19
スパイ達が行き着く未来	23
連鎖する救いの手	28



## 隻腕は剣で語りあう

私の姉はISの生みの親で超有名人になった。そのせいで小学4年の時から何度も転校を余儀なくされ、友達と呼べる人はいなかった。そして高校はIS学園に強制的に入学させられた。私はISなんて知らないのに・・・そんなことを学びたくもないのに・・・私は、篠ノ之東ではないのに。

だが幸いなことに幼馴染の一夏がISを動かしてしまったようだ。世界初の男性IS操縦者としてここに強制入学され、女子高に男一人となり、相当縮こまっている。私も心細かったから、数少ない幼馴染の二人のうち一人がいるのは少し安心。

私には数少ない幼馴染の少年が二人いる。二人とも私の父が開いている剣道場で知り合い、当時から無愛想であった私の友達・・・いや、一夏は友達だ。もう一人は・・・それ以上、だと私は思っている。

その後自己紹介で一夏が情報量の少ない自己紹介をして、姉の千冬さんに小突かれる。そして千冬さんへの歓声を鎮めた後に千冬さんはみんなが気になっていることを言う

「さて、今空いている席があるが、その生徒が今到着した。入ってもらおう。入ってこい」

「分かりました」

その声で教室がざわつく。明らかに男性の声だったからだ。だが彼が教室に入った瞬間、しんと静まり返ってしまう。私も声を出すことができなかった。

一夏と同じくらしいの背丈で、すらつとした体型。一夏と同じくらしいの美形でそして私の・・・私の初恋の相手。

なのに

「茅野<sup>かやのつき</sup>月です。世界で二番目の男性IS操縦者です。剣術を嗜んでいます。まずは一年間よろしくお願いいたします」

一夏よりもすっかりとした自己紹介で一礼する彼。今もなお剣の道を歩んでいることを知れてこれ以上嬉しいことはない。

そして、初めての休み時間に私と一夏の前に来る

「久しぶりだね。一夏、箒。箒は6年ぶり、一夏は4年ぶりか。元気してた？」

久しぶりに会った友人として当たり障りのない会話。私のことを覚えてくれていた

ことで普通だったら舞い上がっているに違いない

なのに

「つ、月……なんだよな？」

「そうだよ。幼馴染の月だよ。いや、二人とも成長したね。箒なんか美人になって」

「そ、それよりも……」

聞いてはいけないような、でも聞かなければならないようなことを。私は絞り出すようにして……言う

「月……腕は？」

初恋の彼の左腕は包帯でぐるぐる巻きになっていた。

そして、その夜私は思い知らされる。彼の左腕が、怪我では済まされていなかったことに

## 記憶喪失の少年が恋する人は

「ねえ、潤。．．．が．．．たら、．．．てあげる！だから．．．」

夢を見た。多くのノイズがかかっているが、懐かしいような、嬉しいような、そんな夢。

俺の名は上野潤。さつきまでは普通の中学3年生だった。だが、先ほどのIS適性検査で男であるはずなのにISを動かしたということとIS学園に連行されている。どこにでもいる普通の生徒だから研究所送りにされるのだと思っていたのだが、どうやらブリュンヒルデこと織斑千冬さんが待ったをかけてくれたらしい。だけど、何故俺のことを気にかけてくれたのだろうか？

．．．アレも碌にない俺を

IS学園の廊下。私は楯無から貰った書類を持って目的の部屋まで歩く

「お疲れ様です、先輩」

「山田君か。今年はいレギュラーが出てしまったからな」

「一人は弟さんですよ。びっくりしましたよ」

「全くアイツは・・・余計なことを」

表情には出さないように努めるが、本当は同じ学び舎で、しかも弟に教師として教えることができるのはとても、とつても嬉しい。逆に嬉しくないと思う姉がどこに居ようか？

いるわけなからう！

「それにしても、もう一人の子は先輩のお知合いですか？」

「ああ、コイツは一夏と箒・・・織斑と篠ノ之の幼馴染だ。まさかコイツもI Sを動かすとはな・・・だが」

上野潤、小学校の時の一夏と箒、そして鈴の幼馴染だ。彼の両親にも数えきれないほどお世話になった。だが中学に上がる前に両親の都合によりここを離れてしまい、それ以降連絡が途絶えてしまった。

今どうしているのだろうか？そんな軽い気持ちで更識に調べてもらったのだが・・・

「？その紙は？」

「上野の中学までの経緯だ。山田君も目を通しておいた方がいい」

「どれどれ・・・!!!」

私もこの資料は信じられなかったよ。悪ふざけだと思つて半殺しにしたのは申し訳なかったが、そのくらい信じられなかった

「こ、これ本当ですか？」

「本当らしい。だからこそ、彼にはさりげなくサポートをしてもらいたい」

「分かりました。任せてください！」

来客用の部屋にたどり着き、ノックして部屋に入ると2番目の男性I S操縦者が笑顔でこちらに来る

「初めまして。私、男性I S操縦者となりました、上野潤です」

「織斑千冬だ。久しいな、潤」

「久しい・・・そういうことですか」

まさか、両親が亡くなった上に本人も記憶喪失になっているとは・・・な

記憶をなくした少年は幼馴染と再会する

「どういうことだよ！初めましてって！」

「悪い、俺、記憶が無いんだ」

そして

「・・・最ツ低!!」

「待ってくれ、鈴！潤は・・・」  
怒りを買ってしまおう

「記憶、戻る日は来るのかな？」

バトル?・恋愛?・ハーレム?・俺がやりたいのは○○だ!!

「本当にごめんなさい!間違えてあなたの人生を終わらせてしまいました!」

気が付いて早々、あどけない少女の土下座が目の前に広がっていました。ああ、よくある神様転生のテンプレだ

・・・

「嘘オ!?俺死んだの!?!」

あまりのことで思わず叫んでしまった。これに関しては悪くないと思う

「そんな・・・せっかかないところに就職が決定していたのに・・・今までの努力がパーかよ」

「すみません・・・」

「・・・少し時間をください、気持ちを落ち着かせます」

体感にして2時間程度が経つてようやく落ち着いていた。そしてこれからのことについて目の前にいる神様から説明を受ける

転生先はライトノベルで一昔盛んだったインフィニット・ストラトスであること、転生にあたって特典が決められるということ。そして、自分含めて7人が転生するという

こと

「7人って・・・多くないですか？」

「それが、最初の一人がとんでもない人でして・・・」

曰く身体強化に頭脳強化、最強クラスの機体にニコポ、ナデポと特典を詰め詰め込んで主人公の座を奪ってハーレムを築こうとしていたらしい。流石にそれを見過ごせないため、当人には伝えてないが特典をかなり弱めて転生させたらしい。だが、それだけではまだ不安要素が残っていたため抑止力としてまともな魂を持つ6人がともに転生することになったとのこと。つまり、俺はその一人というわけか

とはいってもなあ

「特典って個人的にあんまり好きではないんですよ。なんかズルしてる感じで」

「でもあなたは前世ですごく頑張っていましたし・・・少しくらいならあっても問題ないですよー」

「・・・なら二つほど」

この才能は欲しかったのと、転生先でも楽しく生活できる特典を貰おう。その特典を神様に伝える

「ええっ!?ほ、本気ですか!?もつといい特典でもいいんですよ!それに一つは特典って言えるものでもないですし!」

「いいんですよ。俺は『コレ』であの問題児の改心をアプローチしてみます」

「・・・分かりました。では」

手をかざされると同時に体が光り意識が薄れていく。これで転生されるわけか

「それでは、よき第二の人生を！」

とある男子中学校の体育館。いつもなら運動部が活動する場だが、今日この夜の時間だけはまるでライブハウスのような雰囲気になっている。自校だけでなく他校の生徒もおしやべりをしながら立ってステージを見る

ステージの上に4人が立つ。リーダーのボーカルが開会の言葉を言う

「皆様、大変長らくお待たせしました。今日は・・・非常に残念なお知らせがあります」

ざわつきが無くなり、ライブとは思えないような静けさが辺りを包む

「この度、ギター担当のフェルムが・・・この学校から転校してしまいます。なので、今日が最後になるかもしれないライブです・・・フェルムから一言」

「・・・皆、IS動かしてすまない。IS学園に強制入学することになってしまった」

気にすんなー!と励ましの声が響く。それに微笑んでフェルムは言葉を紡ぐ

「でも・・・このバンドから抜けるつもりはない! IS学園からこつちに通うこともできる

だろう!? だから、安心してくれ! 解散じゃない! 休憩だ!!」

うおー!! と歓声上がる

「だから・・・俺も女作つてくるぜ!!!」

「○ね!!」

「くたばれ!!!」

「なんでだよ!!」

ベースとドラムからのブーイングが広がり、応援の歓声から一転、ブーイングの嵐になる会場。抜け駆けを許さない中学生たちのようだ

「まあ、女作つたら東京湾に沈めるとして・・・」

「怖えよ!!」

「とにかく! 今日はどことん盛り上げて、フェルムを送り出そうぜ皆ア!」

オオオオ!!!

「まずは1発目! この曲から始めるゼエ!!」

静まらない夜が幕を上げる

臨海学校の1週間前、水着を持ってないラウラのためと言って水着を買いに行ったの

だが、いつの間にかいつものメンバーが集まっていた。男でないのは面倒な奴と鉄気か

「・・・む？」

「どうした、ラウラ？」

「嫁よ、あそこに鉄気がいたような気がしたのだが」

ラウラの目線の先には小さなステージがある。そこはたまに大道芸とか芸能人が来て盛り上げているらしいが・・・

「あのギター持つてる人？確かに鉄気に似ているね」

「ほんとだ、そっくりだな」

「・・・なあ、あれ本人じゃね？」

「そういえば、バンドやっていたって言ってたような・・・」

「じゃあ本人か？」

いつもはギターソロやピアノソロで歌っていたから、気になる。それは俺だけではないさそうだ

「少し見ていきませんか？時間はありますし」

「ほんとは見たいだけじゃないの？」

「な、何をいつてるのですか！」

「でも俺も気になるし．．．身に行かないか？」

「いいな！行こうぜ皆！」

IS学園に入った彼は音楽で生きる

一人でも多くの生徒の心をつかむ

時にバンドメンバーが集まって音楽を楽しむ

音楽で全ての人の心をつかむことはできるのか？

そんな彼がIS学園で生活する話

「何でいるの!?!いつから見ている!?!」

## 見殺しにした贖罪

悲鳴、死体、消えゆく命。その中で少年が奮闘する。そこに死にかけの夫婦が彼を呼び……

「……またこの夢か」

俺の名はエディ・ブラッドリー。15歳の医者だ。信じられない人が多いだろうが、11歳の時にアメリカの大学を飛び級で卒業し、医師免許を取得した正真正銘の医者だ。孤児院の近くに図書館があって、その本をすべて読破したらいつの間にかこうなっていた。あの時は少しだけうぬぼれていたと思う。

あの事件が起こるまでは

何が医者だ。助けるものも助けられずに。気にするな、お前の判断は間違っていない。膨れ上がりかけたプライドも、医師としての誇りもすべてが崩れ落ちてしまった。

「もうすぐ着きますよ」

「……がI S学園ですか……」

そして今、ISの適性検査で適性ありだった俺はIS学園・・・2度目のハイスクールの生活を余儀なくされることになる

思ったよりも気さくだった世界初の男性IS操縦者、一夏と自己紹介をしている時に一人の少女が俺たちに話しかけてくる

「ちよつとよろしくくて？」

「何だ？」

「なんですの？そのお返事は！このわたくしに話しかけられただけでも光栄だというのに！」

・・・典型的な女尊男卑の人か。しかし俺には関係ない。誰であれ、平等の命を持っているのだから。だが・・・この子はどこかで見たような？いや、初対面のはずだ  
「すみません、いろいろと忙しくて顔と名前がうる覚えなのです。申し訳ありません」  
「私を知らない？入試首席でイギリス代表候補生の

セシリア・オルコットを！」

「!!」

俺の中で時間が止まった。

オルコット・．．あの時の夫婦の娘、なのか？嘘だ、そんなわけない。そんなことあるはずがない！嫌だ！会いたくない！！しかし、あの時に遺言を託されたのだ。この子に伝えなければならぬんだ！

でも、彼女は絶対に俺を恨む！見殺しにした俺を、絶対！

「あなた、さつきから俯いてばかり。何か言ったらどうなのですか!」

「あ．．．う．．．」

言葉が出ない。言わなければならない言葉が出てこない。目が泳ぐ。焦点が合わなくなつて．．．

チャイムの音で正気に戻る。彼女も怒りながら席に戻つていく。助かった．．．

いや、問題を先延ばしにしているだけだ。言わなければ．．．彼女に両親の本当の思いを伝えなければ．．．たとえ俺が恨まれようと

二限が終わつた直後、エディはセシリアのところにおぼつかない足取りで歩む

「．．．何か用ですの?」

「今からやるのは個人の行いだ。男だからと、括らないでほしい」

意を決するようにエディは言った後、両膝をついて頭を下げる

土下座だ

「本当に……申し訳なかった！」

「おい、エディ！何して……」

「ふん！あなたは身の丈がよくわかっていではありませんか！それならその行為に免じて……」

「イギリス鉄道崩落事故」

この言葉でセシリアは目を見開き、狼狽する。周りは何が起こったのかわからずざわついているだけだ

「な……何故あなたがそれを……？」

「……俺は医師として救助に向かった。そして……君の両親を見つけた」

二人とも大量出血だった。輸血をすれば助かるかもしれないが、それがすぐに手に入るほど猶予がなかった。その周りにも重症の人々が多かった

だから……だから！

「そこで、君の両親に俺は……俺は……俺は……俺は……！」

黒のトリアージを付けた・・・!!」

少年は懺悔する。あの日助けなかった両親の子へ。

少年は語る。あの日助けられなかった両親の遺言を子へ。

そして、少女は全てを知り・・・

## 人生の原初を探る者

「皆さん、入学おめでとう。私が1年1組の担任を務めるエドワース・フランシイよ。よろしくね」

どこの高校でもありそうな教師の自己紹介。これをどれ程の人が聞いていただろうか？

ここはI S学園、入試倍率1万倍を超える超エリート校、そして女子高だ。I Sは適性を持った人しか動かすことができず、その適正は女しかもつていないためだ。世間ではそのせいもあって女尊男卑の傾向が強くなってしまった。最近までそれに対して不満を抱いてはいた。だが、今はそれ以上に別の問題がある。

俺が世界初の男性I S操縦者になってしまったことだ

俺自身びつくりだよ。かのブリュンヒルデの面影があることと、親がいないことを除いたら一般の人である俺が、まさかI Sを動かすなんて誰が想像できようか。言ってみればゲームで出てくるNPCだぞ。

と、自己紹介が回ってきた

「勇海 いさみ 俊樹 としき です。世界初の男性I S操縦者になりましたが、はつきり言って素人同然

です。いろいろと拙いことが多々あると思いますが、まずは一年よろしくお願いし  
ます」

無難なあいさつでことをすませます。さつきも言ったがここはISを学ぶ上でエリート  
が集う学校だ。彼女たちのほうがISのことを理解しているのは当然のこと。下から  
這い上がる気持ちでいかないとな

で、最初の授業もぎりぎりですらいついて放課後。クラスのみんなも概ね好印象だっ  
たのは幸いだった。幾人かは敵意むき出しだったから、女尊男卑の思想を持つてい  
るうがこればかりは仕方がない。全員に好かれることはできないのだから。

フランシイ先生から寮の鍵を受け取り、これから住む部屋に向かう。後ろにはかなり  
の女子生徒がいて、俺の部屋がどこか気になっていようだった。どうせバレることだ  
し、番号だけを伝えてこれから住む1001番号室の部屋の前に着く。俺がISを動か  
せることが最近に分かったことだったので、残念ながら女子と相部屋になってしまっ  
た。

まずはノックをして中に人がいるか確認。反応がないため、鍵を入れて部屋に入る。  
国立だけあって広く、ベッドも上質のようだ。荷物を置こうとする、その前に

「・・・流石に人の部屋に入るのはどうかと思うよ」

一人だけ部屋に入ってくる強者か愚か者がいたのでそれとなく注意する。わざわざ気配を消してついてきたということは、俺が気に入らないから嫌がらせをするためか、政府の役人から聞いていたハニートラップの奴か

だが、その予想はどれも外れることとなる

「あら、私もこの部屋に住むのよ」

「・・・つまり、君が俺の相部屋の相手ということかい？」

そうよ、と肯定したので荷物を置いて振り向く。外側にはねた青い髪と赤い目が特徴で右手に扇子を持った少女が自己紹介をする

「はじめまして、1年3組のロシア代表、更識楯無よ」

「楯無、君にISの操縦を教わりたい」

「分かったわ、私に任せなさい」

異常と呼べる速度で俊樹はISの技術を伸ばしていく

「俊樹君、仕事よろしくね♪」

「おい！楯無イ!!逃げんな！仕事しろ!!」

時に彼女に振り回されたりもする

そして

「お、俺が・・・いる？」

「き、君が一夏君？」

自身にそっくりな後輩ができることで物語は加速し、

彼は自身の出生の秘密を知ることとなる

## スパイ達が行き着く未来

光影学園こうえいがくえん。そこは都内に存在する中高一貫校。一学年400人のマンモス校だ。そこにはクラスごとにコースが分かれており、普通科、体育科、進学科が1組から9組の計9クラスで各クラスに40人の生徒が所属している。科が違っているとは言えども、体育祭などの交流があり全く接点がないわけではない

ある一クラスを除いて

光影学園の0組。特進科としてこの学園に存在している。だが、その組だけは他クラスとの交流が禁止されており、同じ学校に居ながらどんな人があるかさえ分らない。関わったら最後、生きて戻れないと噂されており、学校の七不思議として語られている。そんな3年0組の中である男子、目元しか見えないほど包帯で顔をぐるぐる巻きにして、左手にだけ白い手袋をした男子が教室に入っていく

「おはようっ」

「天照！　いったい何依頼されてたんだ？」

「他校の膿潰し。静岡の小中一貫校だったんだが……いじめに教師から生徒へのセクハラ、校長の横領とオンパレードだった。創立100年目で廃校をプレゼントしてやった」

「やるじゃん」

「で、その膿たちは？」

「生け捕りにしといた。好きに使っていいぜ。腕とかない奴もいるけど」

「いいねえ！　今日はそいつらで拷問の練習と行こうか!!」

お気づきかもしれないが、この0組は特進科ではない。本来の名前は『諜報科』、いわゆるスパイ育成のための学科。法で裁くことが難しい悪人たちをこの手で処刑するという、考えられないような学科だ。表面上は特進ということでは認められているが、この実態は当人たちと諜報科のOB、担当教師、そして日本の裏組織のみしか知らない。諜報科を卒業する生徒はほとんどが日本のスパイ工作員となつて他国の情報などを盗み取っていく。

そして、先ほどの男子こと『天照氷夜』あまてらひよなはこの学園で最優秀と言われるほどのスパイのエリートであり、時折彼には他校の内部状況を把握するように依頼が来る。そして情

状酌量の余地がないと依頼主からの通達があり、氷夜も同意した場合、廃校にするように動くのだ。情報収集力に暗殺技術、人身掌握、権力者や裏とのパイプがどれも一級品で同期のあこがれとなっている

このまま高校でもその技術を磨く予定だった。だが

「私がIS学園に、ですか？」

「そうだ、君は奇しくもISの適性がある。ならばそこでISや学園の情報を探つてほしい。どうやらそこには我々とは異なる日本の狗も紛れ込んでいるから気を付けてくれ」

「分かりました。理事長」

「……無理はするなよ。息子よ」

「はい……父さん」

「つて安請け合いするんじゃないか。ああくそ、こんなに嫌われるなんてな」

わかっている。所詮雌共は血統を優先する。ブリュンヒルデの弟と敵対すればこう

なるのは分かってはいたが、中学の時と比較してしまうと寂しさが感じる

「要するに、I S動かして偉いと思ってる脳みそ空っぽの無能集団だったということだ。あの男も何故女尊男卑のゴミを擁護するのか・・・脳みそ大麻畑なんだろうな」

I S学園では彼の味方がいなかった。ならば逆に潰すには苦にならない。そう思っ  
て、そう言い聞かせて氷夜はスパイを続けていく。

いつしか彼はI S学園の生徒に対しての感情が消えてしまった

「どうして天照君は僕を助けてくれたの」

・・・たまたまだ。俺に関わるな

これが俺のやってきたことだ。こうなりたくなければ俺に関わるな

「・・・ううん、それは聞けない。だって・・・悲しそうだもん」

・・・うるせえ、首の骨折るぞ？

「いいよ、どうせ助けられた命だもん。氷夜ならいいよ」

・・・

．．．いい加減にしろ！俺に関わるなよ！織斑とこに行けよ！！代表候補生同士で仲良くしてろよ!!!

「嫌だ！君も仲良くなるんだ！そうじゃなきゃ僕も行かない!!」  
やめろよ！構うなよ!!

俺に．．．関わるなよお．．．

その氷を溶かす少女が来るまでは

## 連鎖する救いの手

もしもあの時の出来事が無かったら、というようなことは誰もが思う。君たちは人生で何回そんな出来事があるだろうか？俺はこの15年で4回ある。

まずは小学校5年生の時。シングルマザーで貧しい家庭で育った俺はいじめの対象にされていた。教師は相談に乗ってくれず、親も忙しくて相談できなかった俺。どうやったらよいか小学生ながらに考えつつ、帰り道の途中にある家電量販店のテレビにふと目を落とす。そこには強面なプロレスラーがアップで映った。

稲妻が走ったのを今でも覚えている。それからはいんな人になるように筋トレを時間がある限り取り組んだ。もともとヒョロヒョロだったのだけど筋肉が付き初め、身長もその時に伸び始めて大人顔負けの体型になった。そんな姿になったのを恐れたのか、いじめもいつの間にか無くなっていった。

しかし、結局友達はい人でできなかった。

このままだったらグレたり不良になっていただろう。そんな中で中学に上がって……  
第二の転機が訪れた。

中学は当然地元に行ったのだが、見た目が悪かったのか小学校の同級生の嫌がらせがあつたのか、誰一人と話しかけてこようとしなかつた。もともとイジメ対策でやったことだし、もう慣れている。そう思つて寝たふりをしようとしたときに人影が目の前で止まる。何の用だろろうか？

「初めまして！俺、織斑一夏つていうんだ！」

珍しい奴だと思つていた。でもそれ以上に嬉しかつたんだ。初めて対等に、仲良く話しかけてくれて。少し……いや、とんでもなく唐変木で嫌味と思うことは多々ある。でも、それ以上に誰にでも対等に接してくれる男なんだ。一夏とは初めての友達で、親友で、憧れの奴。

第三の転機は当然これしかない

「なんで俺たち、ここにいろんだらうな」

「俺としては親友がいてくれて助かつたけどな」

ISを動かしてしまい、IS学園に入学したこと。親友がいることや鈴が転入してきたのはせめてもの救いだつたな。

そして、第四の転機は……

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

小さい体に美しいほどの銀髪、眼帯、誰も寄せ付けぬ冷たい瞳。だがその奥、奥の

奥に見えるその瞳に何か本心が隠れているように見える。

それだけじゃない

似ているんだ。幼少期、おぼろげながら記憶に残っている少女と・・・

彼は孤高の軍人にかまう。本人はおせっかいと分かりながらも。一夏では溶かせない氷を溶かそうと

彼は組む。少女が孤独にならないように。初恋の人とは異なると知りながらも  
そして

「本当は一夏の専売特許なんだが、あえて言おう。一夏を、ボーデヴィツヒを、俺が守る  
!!」

力を蓄えるしか知らなかった少年は初めて誰かのために守る